

思春期の友人関係はその後の発達にどう影響するか？

－教育相談への示唆－

横溝 亮一

(1) はじめに

昨年度の私のゼミナール生の卒業論文のテーマが、中学生時代の友人関係がその後の成長にどう影響するか？に集中した。中学生時代や高校生時代の体験は、大学生の学生相談を担当する筆者にとっても、その後の成長に極めて大きな影響を与えるとの認識があったので、その成果に注目していた。学部学生の卒業論文ではあっても、思春期の子どもたちの教育相談を担当するものにとっても意味のある示唆が得られるのではないかと思います、ゼミ生の収集したロウ・データを中心に、分析・解釈は筆者がし直してこの機会に紹介することにした。それ故、ゼミ生の卒業論文とはかなり違ったものになっている。

(2) 質問紙調査から

岩崎有紀⁽¹⁾は68名の学生に質問紙調査を実施した。

質問紙の内容は、①現在までの人生において自分に一番影響を与えたと思う活動の内容を問う質問 ②その時期についての質問 ③上記をふまえて、自分に一番影響を与えたと思う出来事の具体的な記述と、その出来事の感情体験の種類と強度の評価を要請する質問 ④その出来事がどのような意味で自分に一番影響を与えたのかの具体的な記述の要請 というものであった。

その結果、①の自分に一番影響を与えたと思う活動としては、部活動をあげたものが、37名で、過半数を超えていた。以下、アルバイトが11名、クラスが7名であった。

②のその活動の時期についての回答は、中学生時代が20名、高校生時代が22名、大学生時代が19名であった。

この調査の面白さは③の自分に影響を与えた活動（出来事）に、体験した本人にその体験に付随する感情の種類と強度を評価させている点である。測定した感情はポジティブ感情として、楽しい、嬉しいの2感情、ネガティブ感情として、辛い、悲しい、怒りの3感情の評価を要請した。そしてある操作的な定義をして、ポジティブ感情の高い群と低い群、ネガティブ感情の高い群と低い群を取り出し、2×2で4グループを作った。以下、ポジティブ得点をP得点、ネガティブ得点をN得点と略する。

4グループの年代的な分布状況を示すと以下のようなになる。

①P得点が高く、N得点が低いグループ

大学生時代 14名

高校生時代 10名

中学生時代 7名

②P得点が高く、N得点も高いグループ

高校生時代 7名

中学生時代 4名
 大学生時代 2名
 小学生時代 1名

となる。

この調査結果から明らかになったことは次の通りである。

③ P得点が低く、N得点が高いグループ

中学生時代 7名
 高校生時代 5名
 大学生時代 3名
 小学生時代 2名

④ P得点が低く、N得点が低いグループ

高校生時代 1名
 中学生時代 1名
 小学生時代 1名

以上の結果になった。

これを時代別に集めてみると

大学生時代—①群 14名 ②群 2名 ③群 3名
 ④群 0名
 高校生時代—①群 10名 ②群 7名 ③群 5名
 ④群 1名
 中学生時代—①群 7名 ②群 4名 ③群 7名
 ④群 1名
 小学生時代—①群 0名 ②群 1名 ③群 2名
 ④群 1名

となる。

これを、P得点が高い群 ①+② N得点が高い群 ②+③ と足し合わせてみると、

大学生時代 P得点が高い群 16名
 N得点が高い群 5名
 高校生時代 P得点が高い群 17名
 N得点が高い群 12名
 中学生時代 P得点が高い群 11名
 N得点が高い群 11名

① 現在までの人生において自分に一番影響を与えたと思う活動（出来事）の時期を大学生時代と答えた調査協力者の多くが、その体験をポジティブな感情（楽しい、嬉しい）を伴う体験として経験している（16名）、その体験にはネガティブな感情（辛い、悲しい、怒り）が伴うことが少ない（5名）。

② 現在までの人生において自分に一番影響を与えたと思う活動（出来事）の時期を高校生時代と答えた調査協力者の多くは、その体験をポジティブな感情（楽しい、嬉しい）を伴う体験として経験しているのだが（17名）、同時にその体験をネガティブな感情（辛い、悲しい、怒り）を伴う体験として経験しているものも多い（12名）。

③ 現在までの人生において自分に一番影響を与えたと思う活動（出来事）の時期を中学生時代と答えた調査協力者の半数は（11名）、その体験をポジティブな感情（楽しい、嬉しい）を伴う体験として経験しているのだが、同時に調査協力者の半数が（11名）その体験をネガティブな感情（辛い、悲しい、怒り）を伴う体験として経験している。

まず上記の結論①の内容を知るために、現在までの人生において自分に一番影響を与えたと思う活動（出来事）の時期を大学生時代と答えた調査協力者の具体的記述を見ていこう。P得点が高くN得点が高い①群に分類された人の具体的な記述である。

以下、活動➡時期➡出来事➡影響の順に記載する。

- ・その他➡大学生➡大学受験に失敗し本学に➡今までには出会えなかった人たちに会えて、プラス思考になった
- ・アルバイト➡大学生➡さまざまな人たちとの出会い➡知らなかったことが知れて、新しい価値観が生まれた
- ・アルバイト➡大学生➡自分の性格や集団での立ち位置を自覚➡自分の素を知れたことで、他の人間関係の中での立ち位置や振る舞いが変わった
- ・アルバイト➡大学生➡社会と触れ合えるようになった➡さまざまな性格のお客様がいるため、それぞれ異なった対応をする必要があった
- ・アルバイト➡大学生➡人見知りが治った➡初めて会う人でもうまく話せるようになり、インターンでもあまり緊張しなかった
- ・アルバイト➡大学生➡バイトでお金を扱ったり、働いた分のお金がもらえたりしたこと➡経済活動の経験をしたこと
- ・アルバイト➡大学生➡バイトで人との接し方について学んだ➡いろいろな人と話すのがつらくなかった
- ・部活➡大学生➡部活によって視野が広がり沢山の経験をした➡物事に対する考え方の変化、忍耐力がついた
- ・サークル➡大学生➡上京➡地元に行ったら出来なかったことが出来たり、知らなかったことが知れた
- ・サークル➡大学生➡？➡さまざまな世界が広がった
- ・ゼミ➡大学生➡自分の内心に触れたことが初めてだった➡自分の考えていることやどういう人間なのかなど新しい発見
- ・ゼミ➡大学生➡ゼミでの活動、ゼミ長の体験➡自分についての理解が深まり、ありのままの自分を受け止められるようになった。人前で話すことに抵抗がなくなった。まとめ役も引き受けてもいいかなと思えるようになった。

- ・ゼミ➡大学生➡競技以外に健康志向、楽しむ志向など多様性があることを知った➡競技に行き詰まっていた時に楽しむ志向でもいいのだと肯定された気がした。

「新しい人との出会い」「知らなかったことが知れた」「地元に行ったら出来なかったことができた」「自分の素が知れた、自分についての理解が深まる」「社会との触れ合い」「新しい価値観が生まれる、考え方の変化」などが、その具体例になる。

大学生になってからのアルバイト体験、部活・サークル体験は、中・高時代の部活・サークル体験とはかなり違う体験をしていることが感じられるし、ゼミ体験は大学生ならではの体験であり、そうした新しい体験が大学生の精神的成長にプラスに寄与している姿が見て取れる。

次に、P 得点が高く N 得点も高いグループ（グループ②）では、自分に一番影響を与えたと思う活動（出来事）の時期を高校生時代と答えた調査協力者が一番多かったので、このグループの高校生時代と答えた調査協力者の具体的記述を見て行くことにする。

- ・部活➡高校生➡多くの人に出会った➡考え方や価値観が変わった
- ・部活➡高校生➡陸上部のマネージャーで力を注ぎ、仲間を想った➡自身に繋がってるし、軸となっている
- ・部活➡高校生➡仲間との関わり、目標に向かうこと➡精神力の強さや人を思いやる気持ちの内面の強さに影響
- ・部活➡高校生➡仲間と一緒に頑張った➡最後の大会で優勝➡夢はあきらめなければかなう。他校から批判されたりと 1 位は孤独だとも思った
- ・部活➡高校生➡受験勉強で朝早くから夜遅くまで勉強して辛かった➡強くなった

- ・部活➡高校生➡初めてのソロコンテスト、他人から無理だと言われ悔しかったが一生懸命練習しまくって、1回戦代表、2回戦ダメ金になれた➡自分の時間を出来るだけ費やし成功に繋がれた、悔しさをばねにする
- ・部活➡高校生➡コーチや監督に言われた言葉が心に響いた➡自分の欠点を言われ情けなさを感じて悲しかった。見ててくれる人がいる嬉しさ

自分に一番影響を与えたと思う活動(出来事)の時期を高校生時代と答えた調査協力者全員が、その活動内容として、部活をあげている。部活仲間との連帯感を支えとして、苦しみや辛さを耐え抜いた上での喜びであり、その頑張りが自己の成長に繋がっていると肯定的に評価しているものが多い。また、他者からの批判をバネにしたり、成長促進の契機にするものもある。しかし、ポジティブな感情と共に(辛い、悲しい、怒り)というネガティブ感情も同時に強く感じている者も大学生時代の部活・サークル体験に比べて、圧倒的に多くなるのが印象的である。

さて、次はP得点が低くN得点が高いグループ(グループ③)を見ていこう。このグループでは、自分に一番影響を与えたと思う活動(出来事)の時期を中学生時代と答えた調査協力者が一番多かった。それ故、中学生時代と答えた調査協力者の具体的記述を中心に以下列挙してみる。

- ・クラス➡中学生➡クラスメートとの衝突➡してはいけないことの線引きができるようになった
- ・部活➡中学生➡上下関係の大変さを知った➡周りを見る機会になった
- ・クラス➡中学生➡失恋➡思考がネガティブになった
- ・部活➡中学生➡上下関係やいじめ➡仲間外れ

や争い事を避けるようになった。平和主義になった

- ・部活➡中学生➡グループ間での悪口➡自己肯定感の欠如、認知のゆがみ、人間不信感
- ・部活➡中学生➡一人の女の子に執着され嫌がらせをされた➡自分には理解できない人がいる
- ・部活➡中学生➡いじめによってやりたかった部活が出来なかった➡できないままで終わりがたくなかったため克服する努力をしている

このグループでは、自分に一番影響を与えたと思う活動(出来事)は、クラスか部活になっている。傷付きやすい思春期前半の中学生時代に、心に傷を負い、その体験が外傷になり、いまだにその悪影響から抜け出すことが出来ない若者も数多くいるようである。特に、半数の者が(50%)、ネガティブな体験とし、その影響を今でもかかえていることには、注目する必要がある。

P得点が低くN得点が高い、このグループ③には自分に一番影響を与えたと思う活動(出来事)が起こった時期を、大学生時代や高校生時代と答えた調査協力者や小学生時代と答えた調査協力者もいるのでそうした人たちの具体的記述も見ていこう。

- ・部活➡大学生➡友人の失踪➡貸していたものを返してもらえず人間不信に
- ・アルバイト➡高校生➡どんなに練習してもギターが引けなかった➡センスを知って挫折を知った。何でもむやみに手を出さなくなった。
- ・部活➡高校生➡受験期での人間関係➡自分に自信を無くした
- ・クラス➡小学生➡ほとんど友人が出来ず、一時期避けられた➡自分の存在価値が低いと思うようになった

- ・クラス⇒小学生⇒学級崩壊⇒人付き合いが嫌になるほどひねくれた

さらにP得点が低く、N得点も低い調査協力者も数名いた。その人たちの具体的記述を見ていこう。

- ・クラス⇒中学生⇒なし⇒人間関係が面倒⇒人見知りも悪化し、自分勝手な性格も強まった（この回答者はグループ④の調査協力者である）
- ・部活⇒高校生⇒同じ部活でほとんど一緒にいた子が亡くなった⇒自分によって死んだ人の扱い方、考え方が変わった

こうしてマイナスの影響を引きずっている学生の記述からは、中学生期を中心にして、すでに早いものでは小学生期からその悪影響が持続している学生がいることが明らかになった。

同時に、自分に一番影響を与えたと思う活動（出来事）を、より幼い年代と記述したものに、深刻な悪影響があることが見て取れる。

この結果から、早期の心的外傷体験は、なるべく長引かせることなく、早期の段階で克服できるように手助けすることが教育相談を担当するものにとっての重要な課題であることが浮かび上がってきたといえる。

（3）中学生時代の友人関係のその後の人格形成に及ぼす影響についての質的研究調査より

永田帆乃佳⁽²⁾は調査対象を中学生時代に絞り、特に中学生時代の友人関係でのトラブルの有無とその時の調査協力者のとった行動、その時の友人関係が今の自分に何か影響していると感じているか？、考えているか？を20名の学生を対象に半構造化面接を実施し、調査した。永田は

- ① 内面的プラスの変化
- ② 内面的マイナスの変化
- ③ 対象選択の変化
- ④ 人との付き合い方の変化
- ⑤ 中学からの変化はなし
- ⑥ 家庭環境による人格形成

の6つのカテゴリーが生成された結論付けていたのだが、永田が生成されたとするカテゴリーとは別に筆者が発話例を参考にしながら、再カテゴリー化したところ、次のようなカテゴリーが生成された。

- ① 自己開示ができるようになった
- ② 自己変容を目指した
- ③ 人間理解が深化した
- ④ 自分を守る行動をとるようになる
- ⑤ 人間不信
- ⑥ プライドが高くなりその後の生き方が困難に
- ⑦ 変化なし
- ⑧ 親との不仲

次にそれぞれのカテゴリーに含まれた発話例を紹介する。

① 自己開示が出来るようになる

- ・同じ部活の子が病んだ時があって、話を聞いてあげていたら、その子が元気になっていって、それで私自身もその子に相談できるようになって、相談を誰かにしていいんだなと思えて
- ・小学校のままだったら流されるままだったけど、中学でいろいろ悪さとかして、自分の意見を表に出せるようになったと思います

② 自己変容を目指した

- ・中学に入って、優しくした方が人に好かれるっていうのを学んで、小学校はとんがってた性格だったんですけど、丸くなった
- ・中学の時に地味なグループにいて、それがコ

ンプレックスで。だから明るいグループの友達を作るようになったというか、高校デビューしたくて、高校は軽音楽部に入った

〈友達を反面教師にする〉

- ・部活でいざこざがあった時に、いじめもあって、その人たちのことをなんて馬鹿な人たちのだろうと思っていて、反面教師にしてそういう人たちのようにはならないようにして自分の気持ちに整理をつけていたと思う
- ・友達が結構ストレートにものを言う子で、行き過ぎたところとかあったから、そういうのを反面教師にして自分はやらないようにした

③ 人間理解が深化した

- ・中学の頃はズバズバ言ってくるやつが多かったから、それと派生して物事をはっきり言わないやつには、何かあるなって、人を見るようになった
- ・いじめられた影響で、自分に合うタイプの子と合わないタイプの子っていうのがわかったかな

④ 自分を守る行動をとるようになる

- ・なんか問題を起こしたくないって思いが強くて、それで今は優柔不断だったり八方美人な態度をとっちゃったりする。
- ・バレー部だったので集団行動。一人でいる時と皆でいる時を変えなくちゃいけないんですけど、グループ行動苦手。一人で何でも出来ちゃうので。中学の時に集団行動を学んで今があると思います。
- ・大人数の時は人に悪いように映らないような言動を考えていたので。今全然自分と関わりのなかった人たちと接する時に、そういうのが残っているかもしれないですね
- ・本質は中学のままですね。交友関係は広いんですけど、誰に対しても気を使っちゃう。中学の頃も友達とカラオケとか行ったりして、

はしゃぐんですけど、はしゃぎきれなくてうまく自分をさらけ出せない

⑤ 人間不信

- ・周りでもめ事が起こり出して、怖いって感じるが増えたんですよね。もう自分からわざわざ渦中に入らなくていい、最悪、私は一人でも良いって考えを持っていたので、すごい人間関係冷めた感じになって
- ・中学で影響していることはない。中学は一人でいいやと思っていたので、誰かに嫌われるとか考えてなかったですね。変わったのは高校です。

⑥ プライドが高くなりその後の生き方が困難に

- ・自分に自信がなかったが、中学の時成績があがって、すごいって言われるのが嬉しくて、自分と周りとの差を感じて、すごくプライドが高くなった。進学校に入って、成績は急降下して、学校をさぼるようになったが、プライドの高さだけは残った。

⑦ 変化なし

- ・中学の時のまんまですね。何も変わってなくて怖いですね
- ・私、中学で苦手だった子のことを考えると、私が今、大学に入ってからでも苦手な子も同じタイプですね
- ・部活も自分以外女子だったので、だからか女子の方が話しやすい。男子といてもたまたま何話していいかわからなくなります

⑧ 親との不仲

- ・友人関係では特にない。親が影響してるかも。仲悪くて、性格が合わない。なんだろう、でも中学の時が一番やばかったかな

以上、中学生時代の友人関係（のトラブル）が、今の自分に影響を与えているか？の問いに

は、①肯定的な影響 ②否定的な影響 ③変化なし ④その他 となった。

① 肯定的な影響としては

- ① 自己開示が出来るようになった
- ② 自己変容を目指すようになった
- ③ 人間理解が深化した

以上の3点が見られ

② 否定的な影響としては

- ① 自分を守る行動をとるようになる
- ② 人間不信
- ③ プライドが高くなりその後の生き方が困難に

以上の3点が浮かび上がってきた

また、③変化なしと答えた調査協力者も相当数いるし

④ 友人関係では特にはないが、**親との関係から否定的な影響を受けているもの**がいることが判明した。

以上、中学生時代の友人関係のトラブルの体験は、精神的成長に寄与すること多いのだが、マイナスの影響を受けた場合には、人間関係からの回避的行動をとるようになる青年も多数いることが分かった。教育相談の場ですでに明らかになっていることが再確認されたといえる。

（４）信頼感に関する質的研究法から明らかになったこと

河内広光⁽³⁾は人が人を信頼する基準について質的研究法（GTA）を用いて20名の学生に半構造化面接を行った。質問項目②では、調査協力者がどのようなものを信頼と考えているのか？質問項目③で、ある人を信頼する上できっかけとなった出来事を話してもらい、質問項目④でその友人と他の人との友人関係の違い

に関して語ってもらっている。

学生相談（教育相談）で出会う学生（生徒）の多くは、信頼できる友人を持たず、孤立無援の状況で相談室に現れるのが通例である。それ故逆に、人がどのような出会いを通して信頼できる友人を作っていくのか、そのプロセスを把握して置くことは教育相談の場に身を置くものにとって有益なことと考えられる。

河内は、

- ① 気にかけてくれた
- ② 安心感が持てた
- ③ 分かり合えた
- ④ 時間を共有した
- ⑤ 物事や活動を共有した
- ⑥ 自分の欲求が承認された

の6つのカテゴリーが生成されたと結論付けているのだが、永田の論考同様に、河内が生成されたとするカテゴリーとは別に筆者が発話例を参考にしながら、再カテゴリー化を試みたところ、次のようなカテゴリーが生成された。

- ① 気にかけてくれた
- ② 受け入れてくれた
- ③ 仲良くなった
- ④ 時間を共有した
- ⑤ 安心感が持てた
- ⑥ 活動の共有
- ⑦ 共通点があった

では、次にどのような出来事や体験から相手を信頼するようになったのか？その具体的な発話例を見ていこう。

① 「気にかけてくれた」

- ・一人でいた時に誘ってくれた
- ・辛いときや悲しい時に大丈夫か？と尋ねてくれる
- ・イベントの係りの時に働いてくれない人がい

て苦しんでいたら心配してくれた

- ・登校できなかった時に、遊びに来てくれたり、教室に手を握って一緒に行ってくれた
- ・相談に乗ってもらった時に、思ったよりも親身に話を聞いてくれた
- ・怒ってくれたり、応援してくれたりする
- ・ちゃんと叱ってくれたこと

② 「受け入れてくれた」

- ・誰にも言えない話を聞いてくれた
- ・一緒に遊ばせてもらったり、部活動に身を置かせてもらったりして受け入れてくれた
- ・受け入れる態勢を作ってくれた
- ・向こう見ずで突っ走って引かれると思ったことでも、迷わず乗ってきてくれた
- ・4人グループのグループ名に自分の要素を入れてくれた
- ・その人が開いた個展の作品に登場していた
- ・ダメもとでお願いしたら、ノートを快く見せてくれた

③ 「仲良くなった」

- ・仲が良い
- ・飲み会で話をしたり、研究の話をしたりして次第に仲良くなった
- ・話を聞いてくれる人で、何回も話しているうちに仲が深まっていった
- ・本の貸し借りを始めて、話をしてみると話が進み、すぐに仲良くなった

④ 「時間を共有した」

- ・よく話していたという時間の流れから
- ・ちょっとづつ話をした年月
- ・席が前と後ろになって、暇さえあれば話していた
- ・ずっと一緒にいた時間から
- ・ともに過ごした時間の流れで
- ・一緒に遊んだり部活動をしたりして気づいたら

⑤ 「安心感が持てた」

- ・一緒にいるうちに安心感みたいなものが芽生えてきた
- ・雰囲気が落ち着いていて、話をしても大丈夫だと思えることが多い
- ・久しぶりに会っても、よく会っていた頃と同じように話ができる
- ・進学で離れたことで、久しぶりに会って近況を話すときに分かり合え、居心地がよいと感じた
- ・約束は絶対守る
- ・秘密をちゃんと守ってくれた
- ・連絡がしつこく来ないで、程よい距離感だったから
- ・一緒に出掛けて話をしている中で心を許した

⑥ 「活動の共有」

- ・共に部活動での役割を果たしていた時
- ・部活動でいろいろなことを共に乗り越えてきたこと

⑦ 「共通点があった」

- ・クラスで浮くタイプの人間だったという共通点から
- ・境遇が同じだった

以上、河内のカテゴリー分類とは少し違うのだが、ある人を信頼するきっかけとなった出来事としては、「気にかけてくれたこと」「(自分を)受け入れてくれたこと」「仲良くなったこと」「時間を共有したこと」「(相手に)安心感が持てたこと」「活動を共有したこと」「共通点があったこと」などが半構造化面接では浮かび上がってきた。

「気にかけてくれたこと」「(自分を)受け入れてくれたこと」「(相手に)安心感が持てたこと」の3つのカテゴリーは自分個人を特別な価値ある存在として認知してもらえているという愛着形成理論から見ても愛着形成の基盤となる

態度，対応である。同時に，「時間を共有したこと」「仲良くなったこと」は，同一な対象から常に安定的に安全基地を提供してもらえる（幼児の場合は同一の母親から安定的な肯定的な積極的な反応が得られるということになる）ということになる。まさに信頼感形成の重要なポイントが学生被験者から得られたことになる。

最後になりましたが，快く卒論の使用を快諾してくれた，元ゼミ生の岩崎有紀さん，永田帆乃佳さん，河内広光君に感謝します。

【引用文献】

- (1) 岩崎有紀「青年期の集団生活による精神面への影響」（神奈川大学人間科学部平成27年度卒業論文）
- (2) 永田帆乃佳「中学生時代の友人関係が人格形成に与える影響」（神奈川大学人間科学部平成27年度卒業論文）
- (3) 河内広光「友人関係における人が人を信頼する基準とは何か」（神奈川大学人間科学部平成27年度卒業論文）

【参考文献】

- (1) J. ボウルビィ「母子関係の理論」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（岩崎学術出版社）
- (2) 岡田尊司「愛着障害—子供時代を引きずる人々」（光文社新書）